

わたしは聴衆に

「献身人生とは、イエスと共に歩むことができる最高の人生である」
を知ってほしい

「献身の先にあるもの」

皆さん、こんにちは

今年も半年が過ぎました、

新入生だった4名の一年生も、早半年の神学校生活が過ぎました、

また2年生は丁度、真ん中の期間です、

3年生は残り、半年の神学校生活となりました。

また、今週から中山神学生も寮に加わり、10名の学生が共同生活をしております。

神学生を始めるといことは、

皆さん、何かしらの犠牲を払ってここへきました、

仕事を辞めた方、住み慣れた家を出た方、人間関係を手放した方、

また。自分の将来を捧げた方、

本科でも通信科生の中にもおられると思います。

イエス様のために捨てる人生、

イエス様のために将来を献げる人生、

そして、イエス様のために

自分を捨て、自分のいのちまでも献げる人生があります、

わたしたちは、どうしてここまですることができるのでしょうか

イエスのために捨てる生き方の先には、一体何があるのでしょうか

なにか良いことがあるのでしょうか

福音は使徒行伝の時から、時代をまたぎ、国をまたぎ

そして今、わたしたちの手元に届いております、

しかし、ただ単に、聖書がある、というのではなく、

御言葉をとおして、「イエスの生き方」が伝えられているのです、

イエスの価値観が、イエスの心が伝えられているのです、

そして、それこそが献身者をとおして伝え続けられたことなのでしょう、

殉教者をとおして表されたイエスの生き方、
多くの血を流されて、伝えられたイエスの愛

献身者の内には、イエスの愛があります
献身者の内には、福音の真理があります、
献身者の内には、復活されたイエスが生きているのです、

今日は皆さんに
「献身人生とは、イエスと共に歩む最高の人生である」
ということを是非知ってほしいと思います

メッセージタイトルは、
「献身の先にあるもの」です

マルコ 8 : 34-38

1, イエスの愛を共有しましょう

今日のポイントは一つです、
献身人生とは、イエスと共に歩む最高の人生
それは、
「イエスの愛を共有します」
ということです

イエスの愛は目には見えませんが、
イエスの言葉を信頼する時に、
わたしにとって、とても大きなものであると気づくのです。

ここでの話は、8章から続いております、

5つのパンと2匹の魚
パリサイ人のパン種には気をつけなさい
そして、再び5つのパンと2匹の魚、4000人を養った話
盲人の目をイエスが癒す話

ここでの一つのテーマをあげるならば、
律法に生きることが、神の国に生きることではなく、
福音を信じる者、
すなわちイエスを信じるものとおして
一粒の小さな種から、神の大きな国を体験するということがあげられます、

イエスは荒野に 40 日間おりました、
しかし、この荒野のただ中に、イエスは神の国の生き方をあらわしました、

また、み言葉をとおして、その人の内に
神の国を生きることが教えてくださいました、
30 倍 60 倍 100 倍の神の国の実が与えられるということです

イエスキリストがもたらした福音のみが、神の国を体験するものであり、
それは決してなくなる、失われるものではないばかりか、
その祝福は増え広がるものであることを教えてくださいました、

そして、パリサイ人のパン種に気を付けるように言われました、
神がおられない信仰生活、イエスの十字架がない道徳的な教え
目に見えるもの、世の価値観による宗教的な歩みを注意されました、

パリサイ人のパン種は、イエスの福音とは相反するものです、
神様の前に人生を明け渡さない信仰生活がないのと同じです
自分中心、自己達成を目指した信仰生活はあり得ないのと同じです、

イエスと共に歩む人生は、二人の主人に仕えることができないのです、

8 : 34

今日お読みした聖書箇所は、そのような背景を持ちながら
イエスが語られた言葉なのです。

イエスの愛は、こんなに厳しかった??

イエスはどんな人をも愛して受け入れてくださるのでは??

しかし、わたしたちは

自分を捨てる生き方、十字架を背負う生き方をする時に

イエスとの関係が深まり、

イエスと本当の関係を持つことができ、

イエスを本当に知る生き方となるのです、

自分を捨て、イエスと同じ十字架を負う時に

イエスの愛を共有することができるのです

8:34

釈義

ここでの箇所は、沢山の時制が使われております、

～した

～する

～し続ける

～したい

～するだろう

「自分を捨て」

命令形、アオリストの時制で書かれてあります、

すなわち、イエスに従う前に（共に歩む前に）

自分を捨てなさい、捨ててからきなさい、捨ててしまってから、

「十字架を負って」

これも同じです、十字架を負ってからきなさい、十字架を負うと決断してからきなさい

十字架を負います、と決めてからイエスのところにきなさい

「わたしに従ってきなさい」

これは、現在進行形で書かれてあります

それからわたしに従い続けなさい、今に至るまで従い続けなさいということなのです、

8 : 35-

「自分を捨てる」というこの「自分」とは、
「自分のいのちを救おうと思う者」(35) といえます。

すなわち、

自分のための生き方、自分が中心の生き方、しかしその生き方はたとえ一見よく
見えたとしても、パリサイ人のパン種のように、
それは、信仰無き生き方、神を必要としない生き方、
イエスのいのちと愛なき生き方なのです、

「十字架を負う生き方」とは、「イエスと福音のためにいのちを失う生き方」です、
わたしの人生が、イエスのために、福音のために生きる生き方
しかし、その生き方こそが、いのちを救う生き方なのです、

※ 献身のお証

わたしが、神学校へ入学して、神様から多くの御声を頂いてきたことを振りかえることができています。

1, 献身を断ってしまった

20歳半ばの時に、全国聖会で、わたしは献身表明をしました。

「人生を神様のために捧げます」というものでした。

実は教会にも、そして先生にも受け入れられたのでした。けれども、自分は今思えばとんでもないことをしてしまったのです。

献身するというのは、物凄く、責任のある辛い厳しい歩みであることを感じて、自分はというと怖くなってきたのです。そして、こともあろうに、献身を断ってしまったのです、神様の前にも、周りの方にもとんでもないことをしてしまったのです。それから、わたしはなんてことをしてしまったんだ、と神様の前に後悔をし、教会の一室で、泣きながら悔いたのです。(本邦初公開の証)

「神様ごめんなさい、神様ごめんなさい・・・」と繰り返してお祈りをしました。

「もし赦されて、もう一回道が開かれるのなら、今度は二度と同じことはしません」

と祈りました。しかし、**もう時は遅し、二度と献身の道が開くことはありませんでした。**

【自分はこの苦い思いを心の奥深くにしまい込んでいて、神様は最近になって、当時の心境を思い出させてくれました。】

そして、このようなことがあって、20年が過ぎるのです、心の中では神様への献身という思いを持ち続けていて、しかし自分は断って、裏切ってしまった者なんだ、神様に対して「献身」ということを強くいうことができない後ろめたさがありました。

会社にさえながら、教会に仕えておりました、教会に出来るだけ献身することが、自分の神様への仕え方であると割り切っていました。

しかし、神様はわたしが献身をすることを諦めず、何度も何度も自分に語り掛け続けていたのです。

2, 再献身表明

40歳過ぎ、仕事や家、人間関係が築き上げられていました。
しかし、務めて10年後、会社が吸収され、身近にいた同僚、
信頼を寄せていた上司が次々といなくなっていきました。

また、追い打ちをかけられるように、このようなことがありました、
わたしが心から信頼していた人がいたのですが、ある日突然裏切られてしまったような形
となり、「どうして? どうして?」と心の中で自問自答していました。

わたしは、将来家庭を持ち、仕事も祝福され、教会で奉仕をする
という自分の思い描く将来像から
しかし、現実には「何も得ていない」ことを思わされました、
得ることができない、何か見えないもので閉ざされているように感じました。

生きている喜びや信仰の楽しさ、恵みというものが、
次第に自分の心の中には、まったくなくなっていたのです。

周りの人もいなくなり、そして神様も遠く感じるようになっていたのです。

これが神様がくださっている人生なのだろうか?
自分は一体、何のために生きているのだろうか?
と考え込むようになっていきました。

そのような時に、一人の宣教師と出会いました。
母国に教会をたてており、そこに貧しい子供たちに生活させ
日本から定期的に帰国しておられました、それに同行させていただきました。

宣教師と生活をしながら、
どうして、そんなにキリストのために、福音のために
自分の時間と経済、そして自分の将来をかけることができるのだろうか、
全く、自分の利益にならない、自分にとって何にも益にならない、
自分にとって何も残らないことに

どうして熱心に献げることができるのだろうか、
と始めは不思議な感覚の中で生活をしました。

しかし、

この宣教師の生き方を見ながら生活をするうちに、
わたしの心の中に、次第にじわじわと神様に対する堅い心が溶かされていったのです。
何とも言えない、聖霊による喜びと使命感が再び与えられ、甦ってきたのです。
神の国のために、キリストのために、いのちをかける生き方こそが、
実は自分が求めていた生き方だ

いやむしろ、心のずっと奥底にしまい込んでいたもの、
自分が求めていた生き方である、と悟ったのです。

しかし、自分には自身がありませんでした、いう事ができませんでした、
また、イエス様を裏切ってしまうのではないだろうか、
以前の自分の姿が、やはり思い出されてしまうのです、

帰国していつものように一人教会でお祈りをしていました、
「イエス様、自分は献身してよいのでしょうか？ 自分は献身がしたいです」
このような祈りをしていると、
その時、そーっとイエス様のご臨在がすぐ傍まで近づいて来て下さり、
このように言ってくださったのです、
「あなたがそのように言う時まで、待っていた」と言って下さったのです。

【口語訳】 ルカ

14:26 「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない。

14:27 自分の十字架を負うてわたしについて来るものでなければ、わたしの弟子となることはできない。

14:33 それと同じように、あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない。

14:34 塩は良いものだ。しかし、塩もききめがなくなったら、何によって塩味が取りもどされようか。

「あなたが選んだこの生き方こそ、
幸いな生き方を選んだんだ」とイエス様は言ってくださったのです。

ここに、「 $\gamma\alpha\rho$ 」という言葉が3回登場します、

文を強調させる言葉です、

- 1, 魂、いのちを救いたいと思うなら、それは滅びる 8:35
- 2, 世の全てを手に入れても、何の益になるのか 8:36⇒何の益にもならない
- 3, 真のいのちを得るには、どんな代価を出せばよいのか 8:37⇒他に代わる代価はなにもない

自分を捨て、自分の十字架を負って、イエスに従う人にだけにあるものがあります、
全世界を手に入れたとしても、いやそれ以上に勝るものがあります、

イエスと福音のために献身したものにだけにあるものがあるのです、

それは、「わたしと共にイエスが歩んでくださる」ということです、
イエスが背負われた十字架の横に、自分がいることが出来ることです、

どうぞ、わたしたちは是非、そこにこそある
イエスの愛をイエスと共有する者となりましょう

それはたとえ、どんな困難の中にも、逆境の中でも、荒野の中でも
イエスのいのちがわたしと一緒にあるのです。

これほど、人生の中で最高の生き方はありません、

たった一度の神様がくださった人生です、
何も持つ必要はありません、
わたしの全てを「委ねる」という、少し勇気のいることかもしれません、

しかし、その時には全世界に勝るものを持つことができるのです、

イエスの愛を共有するものとなりましょう、

それこそが、イエスと共に歩むことができる最高の人生です

わたしたちは、イエス様の十字架を共に負っていきましょう、
そこにだけある、イエス様の愛があります、
そこにこそ十字架のイエスが共におられます